

# 松村通信第98号

2018年11月9日  
松村勝弘

## 正統と異端、そして国家戦略

**正統と異端** 『丸山真男集別種第四巻 正統と異端』(2018年6月, 岩波書店)という本が出たことを知ったけれども, そして購入して読み始めたけれども読み終えていない。これに関連しては後日考えてみようと思う。むしろここでは「正統と異端」をめぐる問題について考えてみたい。

丸山がそのような問題意識を持ったのは, どうやら, 戦時日本で「非国民」という排除の論理が蔓延したことへの反発らしい。「非国民」というけど, では「国民」とは何か。それをないがしろにして排除だけを問題にすることの問題性が意識されたようだ。今でも排除の論理は根強く残っている。ヘイトスピーチや「自己責任論」にそれが現れる。それがいやならこの国から出て行け, というのがそれだ。ヘイトスピーチをいう人間, 自己責任をいう人間は, 一体何様なんだ。どんな正統性を持っているんだろう。正統という言葉をさらに考えていくと, いろんな問題に突き当たる。これはまた日本に限らない。こんなものを見つけた。

**西洋中心史観** 「オリエンタリズムは、『西洋(我々, 支配者, 白人, 文明) vs 東洋(他者, 被支配者, 非白人, 野蛮)』という二項対立によって成り立っており, 政治的支配者である西洋は, 東洋が何たるかを(実際に東洋に住んでいる人間の思惑には関係なく)定義することによって, 知の面でも支配を確立するのである。」(和泉真澄「アメリカにおけるオリエンタリズムとトランスナショナル・ナラティブ—アメリカンスタディーズの3つの試み—」『言語文化』6-4, <https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/4762/g0604006.pdf>)を見つけた。これは言い換えれば, 西洋が正統で東洋が異端と理解していることと同旨である。

岡本隆司氏の『世界史序説』では「ギリシャ・ローマもオリエントの外延的拡大の産物にはほかならない。」「いわゆる地中海文明とは, オリエントの一部たるシリアの拡大, つまりオリエントの一部としてとらえるのが正当である。」「だとすれば, これを独立の文明とみるわけにはいかない。いわんや地中海文明・ローマ帝国をヨーロッパの祖先ととらえるのも, 誤解である。もつともそうした誤解が, ヨーロッパのアイデンティティとなり, 以後の歴史を動かし, 現代世界の礎になっている事実は, 当時の客観的な史実とは別に認めなくてはならない。」(岡本隆司(2018)『世界史序説—アジア史から一望する』ちくま新書, 55-56

頁)といわれていた。西欧がギリシャ・ローマの正統の後継者と自らを位置づけることによって, まさに自らを正統化してきたのだろう。岡本は西洋中心史観をひっくり返そうとしていて, 痛快。この場合丸山のいう政治的正統=L正統だと思うが, キリスト教で丸山のいうドグマ的正統=O正統にしたのが西欧だった。その典型をアメリカに見ることができる。西欧の正統な後継者, 否西欧を純化したものとして自らを位置づけている。アメリカでキリスト教が大きな力を持つはずである。蛮族を西欧化・文明化することがマニフェスト・デスティニー「明白なる使命」であると自らを位置づけることによって, インディアンを征服し西部を開拓し, さらに植民地拡大に努めた。しかもより洗練された植民地化を推し進めた。戦後日本もその意識でさらに洗練された形で「植民地化」された, と考えることができる。マッカーサーが日本人は12才の子どもだと言ったのは, まさにこれだろう。今のわれわれからすれば, よく言うよ, って思うが。マニフェスト・デスティニーだと思うからこそ, 世界にその文明を広げようとする「善意」を自ら信じていることができるのだろう。まさに, 正統なのだろう。

**中華思想** 少し違った形ではあるが, 中国で華夷秩序・華夷思想が信じられていたのも, これと似ている。最近の習近平の一連の政策にその臭いを感じざるを得ない。だから, アメリカが西欧中心主義の先兵であるとしたら, 中国は中華思想の体现者だといえるから, 今日米中関係・米中冷戦は80年代の日米関係より遙かに深刻だと思う。ウィキペディアからのものであるが, 「春秋戦国時代以後は、『詩経』や『韓非子』『呂氏春秋』などの古典にある『普天之下 莫非王土 率土之濱 莫非王臣』(天下のもの全て, 帝王の領土で無いものはなく, 国のはてまで, 帝王の家来で無いものはない)という言葉にあるように礼教文化の王道政治にもとづいて天子を頂点とする国家体制を最上とし, その徳が及んでいない状態であれば夷と称される。」とすれば, 中国は儒教によって正統化されるのではなかろうか。現在の中国は, 共産主義では, どう考えても, 正統化できない。共産主義・マルクス主義は西洋中心観の思想でもあるから。とすれば, 儒教により自らを正統化するようになる可能性を感じる(その恣意性については, 小島毅『天皇と儒教思想』光文社新書, 2018年, 12-13頁参照)。でも, かつて儒教を廃したことを考えるとき, もう少しソフィスティケートされた形になると思う。新儒学が候補になりそうである。儒教に民主主義的要素を入れた

ものである。

**日本と中国の対米関係** アメリカは自らを追い越そうとする勢力をたたき。日本もたたかれた。日本は、しかし、自らを正統化するロジックを持たなかった。それで腰が抜けてしまったかに思われる。官民協調・企業間協調を正統化するロジックをもてなかった。それで規制緩和により官の力を弱め、結果的に民の力も弱まった。企業間協調も弱まって、日本経済も停滞した。最近に至るまで、あるいは今も、官僚をたたきすぎだと思ふ。それで民間が強くなると思えない。それで、系列資本主義であった日本は市場主義に抵抗してもかなわないと思わざるをえなかったのではなからうか。それで、いわば「武装解除」して、アメリカに席卷されてしまった。その点、中国は「社会主義市場経済」を標榜して、アメリカ流の「自由主義市場経済」に対抗するのではないだろうか。まさに中国では「市場メカニズムの下でのみ正統な経済がありうる」というドグマ(=市場主義的L正統)には対抗すると思われる。「社会主義市場経済」(=儒教的L正統)は鄧小平が当初思っていたものとは違ったものとして、その中身を入れ替つつ、存続するのではないか。市場経済化で中国の民主主義化が進むという通説的理解では、今後の中国を予測することはできないのではないだろうか。中国はいわゆる民主主義ではアメリカに対抗できないのではないだろうか。そこで、新儒家の思想が重要になる。その思想はまだ固まっているとは思えないが、それが洗練されて主唱されるようになるのではないだろうか。とはいえ、日本はどうすればよいのか。ことここに至っては、中国の後追いはできない。ある意味、新たな官民関係・企業間関係の構築が必要なのではないだろうか。私のこの考えは、明らかにいまの日本では異端であるが。

**アメリカと国家戦略** アメリカはトランプ現象で二極分化している。「二つの陣営の激しい対決や批判の応酬こそが民主主義だなどと考えるわけにはいかない。民主主義を支える価値は、民主主義からでてくるのではなく、むしろ、非民主的なものなのである。社会の伝統的秩序のなかにある『自己抑制』『寛容』『思慮』『エリートのもつ責任感』といった価値観は民主主義とは関係ない。それは伝統的な見えない社会規範とでもいうべきものであり、それが失われたとき、民主主義こそが独裁者を生み出すという古代からの『法則』は、今日でもまた現実のものとなりうるのである。」(佐伯啓思「(異論のススめ) 伝統的規範が支える民主主義 寛容さ失えば独裁者生む」『朝日新聞』2018年11月2日号)

そうだろう。「正統と異端」というロジックをここに当てはめると、エリートのアメリカの民主主義と反エリートのプアーホワイト的ポピュリズムの対立、エリート対大衆の対

立に見える。では、どちらが正統でどちらが異端か。ここでは正統と異端のロジックでは解けない問題がある。

プアーホワイトはまさにプアーで貧しい、いわば虐げられている。不満が鬱積している。その不満が富裕層に向かわないで、自分より下の層、有色人種や不法移民に向けられる。不法移民が職を奪うなどなど。もちろんアメリカ固有の人種問題が絡んでくる。複雑である。不満がアメリカを脅かす中国などの新興国に向かえば、国内はまとまる。統治者としてはきわめてやりやすくなる。これが対イスラムでまとまっても国内はまとまる。キリスト教対イスラムとなると、キリスト教から見れば自分たちが正統でイスラムは異端となる。イスラムから見れば自分たちが正統でキリスト教は異端となる。ここでも、正統と異端という切り口では問題を整理できなくなる。ここではたしかに①「自己抑制」②「寛容」③「思慮」④「エリートのもつ責任感」が重要になる。しかしこれら4つはいずれもエリートの側の自己抑制であり、寛容であり、思慮であり、責任感である。大衆の側にそれを求めることはできない。まさにオルテガいうところの「大衆の反逆」なのである。本来エリートが、ことここに至る前に自制して貧富の差の拡大を避けるべきであった。それができない、否むしろ、それをしないのは新自由主義・個人主義の蔓延(利用かもしれない)であり、すべての解決を市場に「委ねた」からであろう。というより、市場にはそんな力はない。新自由主義は標榜されているが、実際は違う。アメリカなどは新自由主義を標榜しつつ、むしろ富者を豊かにするのを国是としてきたのである。

ここにおいて「この20年ほどのグローバルイゼーションにおける、さしあたっての勝者がアメリカ、中国、ロシア、インド、ブラジルなどである理由も明らかになってくるだろう。これらの国は『国家(ステイト)』が強力なのである。政治的指導者や指導層に集中された権力と政府の行政力が強力なのである。」「その強力な『国家の意思』によって、それぞれの国が、それぞれの国の特異な生産要素を戦略的に利用したのである。」(佐伯啓思『経済学の犯罪』- martingale & Brownian motion <https://martbm.hatenablog.com/entry/20121117/135311858>)  
9) お人好しにも政府が背景に退いて、自然の成り行きに任せ、国家戦略を忘れ、他国の横暴を許してきた日本という国の今後が危ぶまれる。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。  
皆さんのご意見を歓迎します。HP  
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。  
フェイスブックもやっています。また、メールで意見  
交換しましょう。メールをよこして下さい  
([matumura@mba.ritsumei.ac.jp](mailto:matumura@mba.ritsumei.ac.jp))。